

# 博士論文要旨

## 論文題名：A. N. ホワイトヘッドの形而上学研究： 〈論理学と美学〉の観点から

立命館大学大学院文学研究科  
人文学専攻博士課程後期課程  
アリムラ ナオキ  
有村 直輝

本稿の目的は、1924年以降のA. N. ホワイトヘッドの形而上学の展開を論理学と美学の観点から明らかにするものである。

ホワイトヘッドは、バートランド・ラッセルと共に『プリンキピア・マテマティカ』（1910-1913）を著し、現代論理学の基礎を築いた人物であるが、その一方で1925年以降独自の形而上学体系を構築した哲学者としても知られている。この後年の形而上学体系は非常に難解であるとされており、これまでのホワイトヘッド研究者たちはその体系の解読に取り組んできた。本稿ではこの形而上学の難解さの一因はホワイトヘッドの哲学的方法論である「思弁哲学」にあることを指摘している。この思弁哲学とは、われわれがすでに持っている認識や直観から出発し、そこからあらゆる存在や経験に適用可能な仮説を作り出すというものである。ホワイトヘッドの形而上学体系もまたこの思弁哲学の結果作り出された仮説としての面を持ち、この体系が難解であるとされてきたのは、この仮説が構築される際に出発点となったホワイトヘッドの認識や直観がそもそも何であったかが明確ではないからである。この問題を確認したうえで本稿では、ホワイトヘッドの思弁哲学の実践の出発点となった認識は、『科学と近代世界』において彼が「信念」として語っているものに該当していることを指摘する。その信念とは、〈宇宙には論理的調和と美的調和があり、宇宙の進展はこの二つの調和によって条件づけられている〉という趣旨のものであった。〈ホワイトヘッドの形而上学の体系はこの信念に支えられており、彼の形而上学はその信念の理論的な展開であった〉、本稿はホワイトヘッドの形而上学の解明のためこのような仮説を提示し、この仮説の実証を試みるものである。

この仮説を実証するにあたって必要となるのは、信念に含まれていた「論理的調和」と「美的調和」の解明である。実のところ、「論理的調和」と「美的調和」という語それ自体は、ホワイトヘッドの形而上学的な著作には頻出していない。しかし論理学や美学に由来する概念を拡張的に用いた記述や、「論理的」「美的」といった形容詞を付された諸概念などは彼の形而上学的な議論の随所に見出すことができ、これらの諸概念は彼の形而上学体系を構

成する重要なファクターとなっている。本稿では、『科学と近代世界』においてホワイトヘッドが「論理的調和」や「美的調和」として語っていたものを、これら種々の「論理的」・「美的」概念との連関から明らかにすることを試みている。

またそれに伴い本稿では、学としての論理学と美学に対するこの時期のホワイトヘッドの見解についても考察を加えている。このような議論が必要とされるのは、ホワイトヘッドが形而上学的な議論において使用する種々の「論理的」「美的」な概念そのものが、彼の論理学および美学の理解にもとづき、その認識に「記述的一般化」を施したものであるからであり、さらに、形而上学の構築と並行して論理学・美学そのものの捉え直しが彼の著作においてなされているからである。本稿は、論理学と美学を着想源としつつ形而上学の体系を構築しながらその形而上学的な観点から論理学と美学そのものを問い直すという、ホワイトヘッドの循環的な思考を辿りながら、先の仮説についての実証を試みるものである。

本論文では、以上のような問題設定のもと、仮説の実証を目指し議論を進めていく。本論文は二部構成であり、第一部においては1924-1925年の過渡期形而上学を、第二部においては1929年以降の体系化がなされた形而上学を対象とした考察を行い、彼が形而上学体系を構築していく過程で論理学と美学の問題がどのように関与していたかについて明らかにする。

第一部第一章では、自身の形而上学を構築しつつあったこの時期の彼が考える実在の基本的要素とその構造について考察しつつ、彼が論理学をその実在の持つ構造に基礎を持つ学として定義していることを示す。第二章では、形而上学的議論に含まれる「美的ファクター」や「美的価値」といった概念の位置づけについて考察する。第一部の議論からは、形而上学が記述しようとする実在の構造、そして論理学と美学の問題がすべて「多の統合」と統合において生じる「包摂と排除」の発想において通底していることが明らかとなる。

第二部第一章では、1929年以降のホワイトヘッドの論理学観を「パターン」と「両立不可能性」の概念から明らかにし、さらに、彼がこの再定義された論理学が将来的に美学の基礎になるというビジョンを持っていたことを示す。その後第二章においてホワイトヘッドの形而上学体系の概要を確認したのち、第三章、第四章では、論理学的概念である「パターン」や「両立不可能性」をホワイトヘッドが形而上学的な議論に組み込んでいることを確認する。第五章ではホワイトヘッドの芸術概念について考察し、過渡期の美学的議論の展開形を確認する。

以上の議論を経て本稿の議論は、かつての「論理的調和」と「美的調和」の信念は、1929年以降の議論において、実在の生成における「予定調和」とその論理的・美的形成条件の説へと結実していることを明らかにし、仮説を実証する。